Ⅶ 東日本大震災に伴う人権問題に関すること

「東日本大震災に伴う人権問題について考えよう」

～正しく知ること、寄り添うこと～

1 ねらい

東日本大震災後において、復興の途中にある被災地や避難生活が続く被災者に対して、様々な人権問題が発生している。そこで、この問題における学校や地域での差別事象や日常会話の中に潜む偏見・差別を教材にして、正しい知識を得ることや被災者の気持ちに寄り添うことを通して、人権問題解決に向けた実践力を身に付けることができるようにする。

2 進め方

(1) アイスブレイキング、3～4名のグループ分け（10分）

(2) ワークショップ①・②（各30分とし、どちらか選択してファシリテーターが進行する）

① 被災者への差別事象を考える「ある日の新聞記事から」

ア ワークシート①の新聞記事を読み、自分の考えを書く。

イ グループで司会者を決め、意見を交換する。

ウ グループで発表者を決め、意見を集約して全体で発表する。

エ ファシリテーターの話聞き、放射能について正しい知識を知る。

② 日常会話から偏見・差別を考える「とある井戸端会議から」

ア ワークシート②の会話について、グループ内で役割分担して練習する。

イ グループで読み合わせを行い、感想を書く。

ウ グループで司会者を決め、意見を交換する。

エ グループで発表者を決め、意見を集約して全体で発表する。

オ ファシリテーターの話聞き、被災地や被災者に対する愛媛県内の取組について学ぶ。

(3) 振り返り（5分）

これらの学習を通して、気付いたことを発表し合う。

3 留意点

(1) 新聞報道による三つの事象に共通している課題は、放射能に関して「無知」であることや、忌避意識^{きひいし}の存在があることを確認し合い、他の人権問題との共通点を押さえる。

(2) 日常会話の読み合わせを通して、被災地や被災者に対する偏見・差別に気付かせるとともに、被災者の気持ちに寄り添うことの大切さや、自分にできる支援の在り方を考えさせることで、参加者の人権感覚を磨く。

(3) いつ起きてもおかしくないと言われている南海地震での被災を想定しながら、東日本大震災に伴う様々な人権問題を自分のこととして考える姿勢をもたせる。

※ 差別を受けたくないという思いによって、当事者（被差別の立場）と見なされる可能性を避けようとする意識

4 ワークシート

【ワークシート①】

「ある日の新聞記事から」

【記事1】

福島県から他県に避難してきた小学生の兄弟が公園で遊んでいました。方言を耳にした地元の子どもたちから、「どこから来たの?」と聞かれました。兄弟が「福島から」と答えると、みんな「放射線がうつる」「わー」と叫び、逃げて行きました。
(2011年4月12日 毎日新聞)

【記事2】

「福島県から来たことを隠しますか」
福島県から避難してきた男子児童は、ある県の小学校への転入手続きで、教師からこう聞かれました。
母親は、意味がよく分からずに「隠さなくていい」と答えました。
男児の席は教卓の前で左右は空席になっていました。
(2011年4月21日 読売新聞)

【記事3】

福島県から他県に避難してきた子どもの保育園の入園が、「原発に対する不安が他の保護者から出た場合、対応できない」という理由で断られていました。
(2012年3月12日 朝日新聞デジタル)

☆ それぞれの記事を読んで、思ったことを書きましょう。

【記事1】

【記事2】

【記事3】

☆ 三つの記事が、他の人権問題と共通していることは、どんなことでしょうか。

【ワークシート②】

「とある井戸端会議から」

☆ グループ内で役割を決めて練習し、読み合わせをしましょう。

- A 隣の〇〇さんところに、福島から娘さん親子が避難してきてるんやって？
B そうなんよ。老夫婦の静かな家やったのに、いっぺんに騒がしくなって。〇〇さんも食事やらなんやら、世話が大変みたいよ。
C ほんでも、原発の賠償金いっぱいもろうとるんと違うん？うらやましい。
B さあ、どうやろ。子どもが二人おるんやけど、Dさんとこの子と同じ小学校やない？
D 一人がうちの子とおんなじクラスなんよ。先生が気を遣い過ぎて、わがままさせとるみたいよ。
A 震災のあと、おじいさんとおばあさんが行方不明やそうやない。それに、お父さんだけ福島の仮設住宅に住んで仕事を探しとるんと。そんなことがあるけんやない。
C それはそうと、明日から〇〇スーパーで「震災復興支援セール」があるけど、行くかな？
D 福島県産の野菜や牛乳やろ？ なんか心配やけん、私は行かんで。
C あっ、噂の親子やない？ いつまでおるんやろな。ちょっと聞いてみよか。
B ちょっとやめとって。なるべく知らんふりしとってや。

☆ 読み合わせをして、感じたことを書きましょう。

☆ 会話の中で、気になったことはありませんか。

☆ この学習から、「私たちにできる被災者支援」とはどんなことか考えましょう。

5 解説

(1) 放射能は本当にうつるのでしょうか。

放射線と放射線物質とを一緒にして、しばしば「放射能」と呼ばれることがあります。放射線を浴びることを被ばくと言いますが、被ばくした人や物から放射線が出ることはありませんし、放射性物質が付くこともありません。放射性物質が人や物に付着した場合を汚染と言います。汚染は、シャワーや洗濯により、容易に取り除くことができますので、その後の日常生活で放射性物質が他人に付着することを心配する必要はありません。(愛媛大学総合科学研究支援センター 増田晴造 医学博士)

(2) 以下は、愛媛県保健福祉課が行った東日本大震災に係る愛媛県への避難者アンケートから抜粋・要約したものです。(調査：平成23年8月8日～17日、45世帯回答)

- 知人、友人がおらず、寂しい。
- 認知症でも参加できるコミュニティはありますか。
- 被災地との温度差があり過ぎて、辛いこと、悲しんだことが多くて、やはり私たちは避難すべきではなかったと思いました。
- 一時帰省の援助などがあれば、傷ついている子どもを連れて故郷の仲間に会わせてあげたいです。
- 放射能を気にして愛媛に来ているのに「いつ帰るのか」と聞かれても困ります。自分のお金で帰ってきて、学用品や身の回りの物は自分でそろえています。
- 「福島」という言葉や、原発の話ができません。
- 愛媛に来たときは、これからどうなるのだろうと思っていました。子どもを守るために必死で逃げてきました。今は愛媛にも慣れ、とても感謝しています。
- 心から感謝しています。子どもたちは、未だにトラウマと新しい環境に戸惑いながら頑張っています。機会があれば声をかけてもらえると助かります。

(3) 愛媛県内では、県や市町が行っている被災者支援のほかに、いくつかのNPO法人等が支援活動を展開しています。以下は、「NPO法人えひめ311」の紹介です。

NPO法人えひめ311は、東日本大震災によって愛媛県に避難した福島県・茨城県の避難者の方々と県内の有識者が、長引く避難に立ち向かうため、「一人一人の心に寄り添い、共に課題を解決していく」をモットーに設立されました。県内の震災被災者を対象とした相談や、防災活動の促進にも取り組んでいます。

開設している相談窓口『明日へつなごう』では、東日本大震災によって恐怖と不安を抱え、愛媛に来られている避難者の方々を区域で分けることなく相談に乗ってくれます。避難者の抱えている事情や悩み、課題は一人一人異なりますが、共に話をし、考え、お互いに解決の道を目指していきます。また、必要に応じて専門家への紹介、アドバイスを受けることもできます。